寂寥郊野

吉目木晴彦

芥川賞 受賞!

アルツハイマー病が愛を砂漠に変えた…。

国際結婚と老いの孤立を描く現代文学の秀作

定価1600円(本体1553円) 講談

寂寥郊野

吉目木晴彦

吉目木晴彦（よしめき はるひこ）

1957年、小田原市に生まれる。1966年から68年まで、ルイジアナ州で生活、その後、バンコクへ渡る。

成蹊大学卒。『ルイジアナ杭打ち』（講談社刊）で野間文芸新人賞、『誇り高き人々』（講談社刊）で平林たい子文学賞を、それぞれ受賞する。

寂寥郊野（せきりょうこうや）

1993年5月20日　第1刷発行
1993年8月10日　第4刷発行

著　者　吉目木晴彦
発行者　野間佐和子
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽二―一二―二一／郵便番号一一二―〇一
電話　文芸図書第一出版部（〇三）五三九五―三五〇四
書籍第一販売部（〇三）五三九五―三六二二
書籍製作部（〇三）五三九五―三六一五
印刷所　凸版印刷株式会社
製本所　株式会社大進堂
定価はカバーに表示してあります。

本書の無断複写（コピー）は著作権法上での例外を除き、禁じられています。
落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。なお、この本についてのお問い合わせは、文芸図書第一出版部あてにお願いいたします。
©Haruhiko Yoshimeki 1993, Printed in Japan

ISBN4-06-206343-3（文1）

目次

寂寥郊野　5
うわさ　129

写真　細野晋司
装幀　山崎英樹

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

寂寥郊野（せきりようこうや）

寂寥郊野

I

一九九〇年十月二十三日、四日続きの細い雨が水はけの悪い庭土に溜まって、芝生一面を湿原に変えてしまったその日、幸恵は、満六十四歳の誕生日を迎えた。

前の週の金曜日に、夫とニューオーリンズまで出かけ、用をすませて家に帰り着いた夕方から、雨が降り始めた。まるで、日本の梅雨のようだった。透き通った晩秋の陽射しの下で息を休めていたバトンルージュの街を、鉛色の雨雲が覆い、冷たく湿った空気の底に、州都全体が閉じ込められてしまった。この分では、悪魔の沼（デビルス・スワンプ）の対岸にある、ベルモントの荷揚げ場や、混血児（ミュラート）の荷揚げ場（ラーウ・ベンド・ランディング）は、閉鎖されてしまうだろう。市街でも、土地の低いところでは、そろそろ道路まで、雨水に浸されているかもしれない。

「一九六七年に大雨があって、ダウン・タウンの辺まで水浸しになったことがあったわね。覚

えている？」

食堂のテーブルに陣取って、古い友人へ宛てた手紙を書いている夫に、訊いてみた。

「そんなことがあったかな」リチャードは生返事をした。「随分、以前の話だろう」

「私は覚えているわ。グリーンデールに住んでいた頃よ」

そうだっけな、彼は相槌を打ち、それきり話が途切れてしまうと、しばらくして首を傾け、そっと妻の顔を盗み見た。彼女は、居間の窓から庭を眺めていた。

この半年ほど、幸恵は不意に、神経が苛立ち、自分の感情を抑えられなくなることがあった。何か気分を害する出来事が、彼女の回りで起こっているというわけではない。本人は、眠りの中で見る夢のせいではないかと思うことがあった。

半月ほど前、コロンブス祭の頃に見たのは、ブルックスタウンにある小学校の脇道を、ハウエル公園へ向かって歩いている夢だった。ショッピング・センターで買った冷凍のチキン・パイを、大量に袋に詰め、両手一杯抱えている。公園からさらに南に下ったラジオ塔の下に、車を置いて来たのだった。センターからは何キロも離れた場所だった。なぜ、そんな気の利かないことをしたのだろうと、ひどく腹を立てている。その上、ディックも、マイクも、ランディも、誰も自分を探しに来ない。三人も男手がありながら、どういうことだと、情ない気分になって来る。

ライアン空港のカウンターに坐って、案内係をしている夢もみた。もちろん現実には、そんな仕事に就いたことなどなかった。若い妻と、五人の子供を連れたメキシコ人が、リベリア行きの飛行機を待って、三日間もロビーに寝泊まりしていた。幸恵はこの家族が気の毒で、早く飛行機が到着しないかと気を揉んだ。

「何、待つのは平気ですよ」

時折、様子を見に行く度に、中年のメキシコ人は、表情一つ変えずに言った。同情して上司に掛け合うと、ここからはリベリア行きの飛行機は出ないのだと知らされる。

「だって、ここは国際空港じゃないんだから。税関だってないだろう?」

ならばどうして、大統領は切符を売ったりしたのだろう? 何で、あの可哀相なメキシコ人の一家を、踏みつけにしたりするのだろう? 隣に住んでいるエディに訴えると、彼らは不法滞在者なんだよ、という答えが返って来た。

「そんなひどい扱いって、ないわよ!」

目を覚ました時、幸恵は自分が泣いているのに気がついた。それはこの二つの夢に限ったことではない。そして、同じ夢を続けて見ているわけでもなかった。

誕生日に、リチャードはスウェードの靴を一足、妻へ贈った。

「ありがとう。いつ用意していたのかしら。気がつかなかったわ」

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.c

「マイクが電話で助言してくれたんだよ」
夫は、天気さえ良ければ一緒に州議事堂（キャピトル・タワー）へでも行こうと思っていたんだが、と言った。テレビには、沼地から溢れ出した水が艀専用の水路（バージ・カナル）を越えて、ミシシッピー河沿いにある南部（サザン・ユニバーシティ）大学周辺の住宅地を浸食する様子が、映っていた。幸恵が想像した通りだった。無用な外出はしないよう、アナウンサーが繰り返し警告している。
手紙を書き終えると、リチャードは居間の長椅子に妻と並んで坐った。二人はほとんど言葉を交わさずに、テレビの画面を眺めて半日を過ごした。

まる五日間降り続いた長雨が、ようやく上がって、一週間ほどたった後の、ある夜半のことだった。
深夜の二時頃、リチャードは咳をしたはずみで目を覚まして、妻がいないのに気がついた。小用を足しにでもいったのだろう、気にもせずに軀の向きを変え、しばらくして再び目を開いた時、幸恵がまだ戻っていないのを知ると、改めて時計を見た。じき三時になろうとしていた。
彼は暗がりの中で上半身を起こし、電気スタンドのスイッチを引いた。焦げ茶色のガウンを

纏い、廊下へ出る。突き当りにある妻の部屋のドアが開いて、明かりが洩れていた。戸口で立ち止まる。声をかけようとする。が、室内に彼女の姿はなかった。

鏡台の前の椅子に、脱ぎ捨てた寝間着が掛けてあった。彼は、部屋を出て、食堂を抜けた。居間を覗く。車庫の脇に立つ誘蛾灯の青い光が、外から忍び込み、暗がりの中の家具の輪郭を、ほのかに浮かび上がらせた。

レース地のカーテンの中央で、オレンジ色の小さな光が揺れているのに、目を留めた。窓に近づき、指先でカーテンの合わせ目を開いた。庭の隅に植えた百日紅の木の傍で、幸恵が焚火をしている。通りを隔てた南側に、誰のものでもない木立ちがあった。その木立ちから吹き寄せられた枯れ葉を集め、燃やしているのである。

こんな夜更けに焚火をして、近所の人に見つかったら、きっと苦情を言われる。リチャードが最初に思ったのは、そんなことだった。

——何しろ今夜は、風もあることだし。

彼は、居間からテラスへ降りた。ガラス扉を開く気配で、振り向くだろうと思った。外側の網戸を閉める時、わざと音を立ててみた。妻は、車庫を掃くのに使う箒を手に、背を向けたまま、地面に盛った枯れ葉から立ち上る、白い煙を見つめている。夫が探しに来たのに、気がついた様子はなかった。今そいつを片付けておかないと、何か不都合でもあるのかね、リチャー

ドは訊ねようとして、思いとどまった。

——大人のやることだ。まあ、気が済むようにさせておくさ。

わざわざ、枯れ葉を集めて燃やす者など、この辺りにはいなかった。際限無く吹き寄せられて来るのだから、そんなことをしてもきりがない。それに風が運んで来たものは、放っておいても風が運び去ってくれる。

彼は、テラスの壁際に据えてあるベンチに腰を下ろした。暦が逆戻りしたかのように、暖かい晩だった。

幸恵が焚火の始末を終えるまで、待つつもりだった。月明かりの下を辷る、影絵のような雲を目で追ううち、自分がか細い鼾をかき始めたのに驚いて、リチャードは背筋を伸ばした。彼女はまだ、枯れ葉の下で明滅する燠火を、箒の柄で突いている。

——大人のやることだ。心配するまでもないだろう。

彼は、寝室へ引き上げることにした。今度は、居間に通じる扉を、静かに閉める。カーテン越しに振り返って見た。幸恵は蹲って、灰の上に、文字を書いているようだった。

翌朝は七時に起きた。九時には家を出て、ローズランド坂へ向かった。パークリッジから六

十七号線を南に下り、ダウン・タウンへ入る。ガヴァメント大通りに面したホテルに、用事があった。レジオン地区（ヴィレッジ）を抜ける途中、モンテ・サノ公園の東側に、大勢の人間が集まっているのを目にした。

「お祭りでもやっているのかしら」

「若い連中が多いな。土曜日だろう。学生が、何かやらかそうっていうんじゃないのかい」

公園の中には、セサミ・ストリートにでも出てくるような人形が、何体も運び込まれている。

「ゆうべは眠れなかったのかね。頭が冴えて寝付けない時には、好きな曲を思い浮かべるといいんだ」

ステーション・ワゴンのハンドルを握り、前方を見つめたまま、リチャードはついでに昨夜のことを訊ねた。

「夜中に焚火をするのは、やめた方がいい」

幸恵は答えない。

「近所の人が見たら、びっくりするよ。ジョーン・ジャンソンなんか、すぐに大騒ぎをする性（たち）だから」

「ねえ、何でそんなことを言い出すの？　ゆうべはよく眠れたわ。ここのところ、体調がいい

のよ」
「夜中に起き出して、庭の掃除をしていたじゃないか。百日紅の植わっているところで、焚火をしていたじゃないか」
「あれは夕食の前よ。六時頃でしょう。夜中じゃないわ」彼女は、夫の顔を覗き込み、笑い出した。「ディック。夢でも見たんじゃない？　変なことを言わないで。これから就職しようっていうのに、不安になっちゃうわ」
リチャードは、自分の言葉を一蹴するような妻の言い方に、驚かされた。驚いた後、今度は幸恵に馬鹿にされたような気がして、不愉快になった。私に対してそういう態度を取るべきではない、強い調子で言い返そうとしたのが、助手席に坐り、呆れた表情で自分の顔を眺めている妻を見て、気分が萎えてしまった。つまらない言い争いをしたあげく、天気の良い一日を台無しにするようなことはしたくない。それに今日は、友人に頼みごとをしなくてはならないのだ。仏頂面で、互いにそっぽを向き合ったまま、会いに行くわけにはいかない。
マグノリア墓地の脇を通り、ガヴァメント大通りを挟んでバトンルージュ高校と向き合う、ショッピング・センターの駐車場に入るまで、リチャードは妻に話しかけようとしなかった。幸恵は、夫の尋常ではない気配を察した。
「どうしたのよ」

彼女が訊ねても、夫は返事をしない。幸恵は、相手の態度が変わったのを訝しく思いながらも、用心深く口を噤んだ。

アンソニー・ハーレイは、ホテルの談話室で、二人を待っていてくれた。彼は壁掛け時計の下で、本を読んでいた。リチャードがフロントの呼鈴を鳴らすと、案内係が奥の部屋から出て来る前に立ち上がり、手で合図をした。

「キャシーの具合が悪くてね。君達に会うのを楽しみにしていたんだが。気分が悪いと言って、部屋で休んでいるんだよ」

「風邪でも引いたのかしら」

「何、疲れただけだろう。ジャクソンでは三日も続けてパーティがあったから」男はリチャードの手を握り、二人に会うのは八年ぶりだな、と言った。「息子さんが結婚したと言ってたね」

「マイクだよ。長男の方だ。もう十年も前の話さ」

「この街にいるのかい？」

「いや、アトランタに住んでいる。コンピューターを作る会社にいてね。日本向けに、部品を輸出する仕事をしているよ」

アンソニーは窓に面した席に坐り、膝の上で両手を組み合わせた。

「日本には三年間、住んでいたんだな。当時、あの国がこんなになるなんて、思いもしなかっ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c